

『「一人」でも「独り」ではない』 牧師 望月 達朗

2月中旬に行われた関東教区主催の十日町雪掘りボランティアに派遣して下さったことを改めて感謝申し上げます。現地の除雪作業は、「雪かき」ではなく、まさに「雪掘り」と呼ぶにふさわしいものでした。都市のなかでは世界一の積雪量と言われる十日町市…1.5メートル以上に積もった雪を1日かけて掘っても、次の朝にはまた元通りというのが冬のありふれた日常です。消雪パイプや流雪溝等の設備は整えられていますが、それだけではとても対処仕切れません。各家が雪に閉じ込められ、結局はそれぞれの所での除雪作業を強いられていきます。また、一人暮らしの高齢者が増えていることや、家族の人数が足りていても、ほとんどが仕事や学校に出かけてしまうので、日中に雪を掘れる人が一人となることが少なくありません。

ボランティア3日目、豪雪地帯にある日本基督教団栃尾教会の除雪作業のお手伝いに行かせて頂きました。豪雪が続く時は、除雪作業だけで一週間が終わるといいます。私たちが行った時には、大方雪が溶けていましたが、それでも屋根の下は落雪で3メートル以上も積もっ

ていました。栃尾教会の手束信吾牧師は、毎朝、教会の庭一面に広がる雪原を見る度に「正直、心が折れそうになる」とおっしゃられていました。しかし、「今、あの場所で、あの人も雪をかいている。あの人が覚えて祈ってくれている」、そう思えるだけで力が湧いてくるのだといえます。一人で除雪作業をしていると、つい目の前の雪を掘ることだけに思いが入ってしまうけれども、そこでふと、同労者や祈り覚えてくれている誰かのことを思い浮かべられた時、そこはぬくもりある世界に感じられてくるというのです。私たちボランティアは、限られた時間での僅かなお手伝いしかできませんでしたが、「心の支えになりました」と言ってくださる手束牧師の言葉にただただ励まされるのみでした。

たとえ、その場に姿は見えなくとも、自分は独りではないと感じられる世界。パウロもまた、自分と同じ様に捕らわれの身となっている同労者の存在が「慰めとなった」(コロサイの信徒への手紙 4:11) こと、また、アカイア州の教会の信仰が、場所を隔てたマケドニア州の教会の「多くの人々を奮いたたせた」(コ

リントの信徒への手紙Ⅱ9:2) ことを伝えていきます。その慰めの輪は、どんどん広がっていったことでしょう。その全ての始まりは、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28:20) という復活のイエスの存在にありました。師を裏切り、師を亡くした弟子達の孤独のなかに、自分は独りではないと感じられるイエスの存在が確かにいたことを聖書は証しています。なぜならそのイエスは、「わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わた

したちと同様に試練に遭われた」(ヘブライ人への手紙4:15) 方であり、「あなたのために、信仰が無くならないように祈っ」(ルカ22:32) ておられた方であったからです。その今も生ける復活のイエスの姿を、私たちも聖書のみ言葉に尋ね求めつつ、「立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ22:32)、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」(ヨハネ福音15:12) という主の道へと招かれる者でありたいと願います。

～私と聖書の言葉～



✠ 「忘れられない聖書の言葉」 佐藤 たへ子さん ✠

聖書の言葉(箇所、文章)は、ある日、ある時突然にスポットライトを浴びたかのように、輝き出すと云うか、心に迫ると云うか忘れられない大切なものになる事があります。最近、そのような事があったので、少し書いてみます。

その人は、彼に尋ねて言った、「あなたは何を捜しているのですか。」彼は、言った。「兄弟たちを捜しているのです。・・・」(創世記37章15～16節)
信徒の友2月号(2016年)「みことばにきく」で内藤留幸先生が、この箇所を取り上げていらっしゃる。60年程前先生が参加したある会で、宣教師キョックリッヒ先生が次のように話されたそうです。

「伝道とは、自分の兄弟達を捜すようなごく日常的な愛のわざの積み重ねです。」

それ以来この箇所は、伝道者としての先生を支える大切なものになったと

云う事です。

キュックリッヒ先生は、私にとっても忘れられない方です。KKS の修養会でほんの 10 分ほどお話を聞いただけなのですが、その時のお話は次のようなものでした。

「私はドイツの教育大学を卒業しました。イエス様がいらっしやらなかったら、私は日本に来る事はありませんでした。云々。」

療養中との事で、短いお話でしたが、とても感激して聞いた覚えがあります。

内藤先生のお書きになったものと私のささやかな思い出を合わせるとキュックリッヒ先生の日本でのお働きの数々に納得がいく様に思われました。そして、今まで読みすごしていたこの聖書箇所がとても大切に思われるようになった次第です。

ちなみに、キュックリッヒ先生の後任は、ジュティーン先生です。

✠✠「み言葉から思うこと」 山村 朗子さん ✠✠

大好きな絵本の一つに、トルストイ原作の「くつやのマルチン」があります。

ひとりぼっちで寂しい心のマルチンは、ある日、「明日行くから待っておいで」というキリストの声を聞きました。翌日マルチンが出会ったのは、雪かきで疲れたお爺さん、赤ちゃんを抱いて何も食べる物がないお母さん、空腹で泥棒した男の子…。

マルチンは各々に暖かい食べ物をあげて優しく語りかけ、皆暖かい気持ちになって帰って行きました。そしてその夜、「マルチン、私がわからなかったのか、あれはみんな私だったのだ」というキリストの声を聞きました。

「貧しい人、力のない人、病気の人や家のない人の中に私はいます」とキリストはおっしゃいました。

マタイ福音書 25 章には「あなたがたが、これらの私の兄弟たち、しかも最も小さい者たちの一人にしたのは、私にしたのです。」と記されています。とても心に残るみ言葉です。

最も弱い一人が大切にされない社会は、最も強い一人も不幸な社会ではないでしょうか。目の前の困っている人（キリスト）に対して、今の自分（マルチン）にできることをする、ということをも大切にしたいと思います。そして、その小さな積み重ねを、神様は大きく用いてくださると期待します。

私たちはみ言葉の力を知っています。殺伐とした世の中にあっても希望を持ち、神様のみ旨にかなった働き、歩みができる者になりたいと願います。

イースタークイズ～あなたは何問（難問？）答えられますか？

Q1. イースターを代表する動物はなんでしょう？

- a、うさぎ b、羊 c、クマ d、クマ

Q2. 将来のイースターの日をどこに問い合わせればわかりますか？

- a、日本キリスト教団 b、文部科学省 c、教皇庁 d、海上保安庁

Q3. スウェーデンでは「イースターの〇〇」というものが部屋に飾られます。〇〇とはなんでしょう？

- a、松の木 b、生花 c、小枝 d、球根

~~~~~

A1. a「うさぎ」：多産であることが理由のようです。聖書的な根拠はありません。

A2. d「海上保安庁」：日本キリスト教団も海上保安庁水路部航法測地課に問い合わせているそうです。

A3. c「小枝」：まだ芽の出していない小枝が売り出され、一見枯れたように見える小枝に、赤、黄、青など原色で染められた鳥の羽が飾られます。この枝を束ねて花瓶に挿し、芽が出てくるのを待つそうです。

**日本キリスト教団 吾妻教会**（創立 1889 年 5 月 7 日）

〒377-0801 群馬県吾妻郡東吾妻町原町 444-9

主任牧師 望月 達朗

TEL0279-68-4730

<http://www5.ocn.ne.jp/~agatu-ch/>

牧 師 望月 奈津子